

「別寒辺牛湿原とその周辺における繁殖期の鳥類群集構造」の簡易要約

鈴木弘之

別寒辺牛湿原は広大な人手の加わっていない原始の湿原！ではありません。低い丘陵状の森林地帯で囲まれて、国道や林道、鉄道、人家、牧草地などのさまざまな環境と隣接し、周辺部は多様な環境となっています。厚岸湖と別寒辺牛湿原の鳥類については約 170 種が記録されていますが湿原とその周辺の様々な環境とどのように生息する鳥たちが関連しているのかの報告はありませんでした。そこで、2001 年夏期(陸性鳥類の繁殖期にあたります)に、別寒辺牛湿原の湿原と周辺部の湿地環境を主とする9つ地域を対象として、環境とそこに生息する鳥類を群集としてとらえて相互の関連について分析を行いました。

結論からいうと、対象とした9地域は湿地環境でもその広さや乾燥度合い、森林林縁部、人為的環境の存在の違いなどにより鳥類の群集構造が違っていました。また、調査、解析でわかったことや考えられること、今後の湿地の保全のための提言など簡単にまとめてみます。

調査の結果は、全地域で合計 55 種の鳥類を確認しました。このうち年間を通じて生息している留鳥は 22 種、夏にやってくる夏鳥は 29 種、通過で見られる通過種は1種でした。最も種数、個体数ともに多かったのはチライカリベツ川沿いのコースで、最も種数が少なかったのは国道によって分断された乾燥した牧場に隣接するコースでした。全体で個体数が多い主要種といわれるものはコヨシキリ、ウグイス、センダイムシクイ、シマセンニュウ、アオジ、ノビタキ、カッコウ、ベニマシコなどでした。

解析の結果は、各調査地において鳥類群集の多様度を表わす多様度指数(群集の多様性を、種数と個体数の2つのパラメーターを用いて、情報量として指数を算出するもので、数値が高いほどその該当群集は多様性が高いことを意味します)というものさしを使って比較してみると、コースによって差が見られました。多様性が高いのは広い湿原とその境の森林林縁部を含むコースと、この環境に加えて人家や荒地、農地などが隣接しているコースでした。また、各調査地間の鳥類群集が似ているかどうかを比較するため、類似度指数というものさしを使ってみると各調査地が3つほどのまとまりに分類されました。人家や荒地、農地などが隣接しているコースは他のコースとは違う分類となりました。また、湿原およびその周辺部は夏鳥の繁殖環境として重要であること、湿原のうち分断されない広い面積でなおかつ森林林縁部などの自然環境に隣接する場所は種類や個体数が多いことなどがわかり、湿地が細分化され、面積が小さくなると生息する種数や数が減少する傾向にあるのではないかと考えられます。

近年、日本全国で夏鳥の減少が報告されています。当地においても主要種は夏鳥であり、湿原を代表する種や湿原と森林の林縁部に生息するウグイスやアオジなどなどの種はそれぞれに適した生息環境があり、環境の変化を示す標徴種ととらえることができます。これらの個体数の経年変化や環境、湿地面積などとの関連を調べていくことは、例えば乾燥化が進行しているなどの湿原の環境がどのように変化しているのかの手がかりになると考えられ、湿地と、湿地に生息する鳥類の保全を図る上で有効であると思われる。